

イチゴうどんこ病に対する各種薬剤の防除効果

～有効な薬剤処理について～

イチゴうどんこ病に対して有効な薬剤を調査したところ、いずれの薬剤でも高い防除効果を示しました。

1. 背景と目的

イチゴ栽培において、最も重要な病害の一つがうどんこ病です（図1）。初めは葉裏の一部にうどんこ粉をまぶしたような白い粉状のカビが発生し、次第に株全体に広がります。一度病気が広がると、完全に防除することが難しくなります。また、果実に発生すると商品価値がなくなるため、生産現場では問題となります。

現在、うどんこ病に対しては薬剤散布を中心とした防除が行われていますが、近年、新しい品種の導入に伴って、発生が多くなっています。そこで、新規薬剤を含めたうどんこ病に登録のある殺菌剤の防除効果について調査しました。



図1 イチゴうどんこ病発病果実

2. 研究成果の概要

試験には8系統10薬剤（表）を用いて、1週間間隔で計3回散布しました。効果は防除価で評価しました。防除価とは、薬剤がどれだけ病気を抑えたのかを示す値で、防除価100は完全に発病を抑え、防除価0は無処理区と同等であることを示します。

その結果、1回目散布7日後の時点では、処理した薬剤の防除価は5.3～75.4と効果の程度にばらつきがありましたが、3回目散布7日後の防除価は85.7～100となり、1週間間隔3回散布でいずれの薬剤も高い防除効果を示しました（図2）。特にパンチョTF顆粒水和剤とサン

クリスタル乳剤は防除価100と高い効果でした。

表 薬剤一覧

系統名	有効成分	商品名 (希釈倍率)
DMI-殺菌剤	トリフルミゾール シフルフェナミド	パンチョTF顆粒水和剤 (2,000倍)
	ミクロブタニル	ラーイ乳剤 (5,000倍)
	シメコナゾール	サンリット水和剤 (2,000倍)
AP-殺菌剤	メバニピリム	フルピカフロアブル (2,000倍)
QoI-殺菌剤	アゾキシストロピン	アミスター 20フロアブル (1,500倍)
アрилフェニル ケトン	ピリオフェノン	プロバティフロアブル (3,000倍)
チアゾリジン	フルチアニル	ガッテン乳剤 (5,000倍)
キノキサリン類	キノキサリン	モレスタン水和剤 (3,000倍)
無機化合物	炭酸水素ナトリウム 無水硫酸銅	ジーファイン水和剤 (750倍)
—	脂肪酸グリセリド	サンクリスタル乳剤 (300倍)

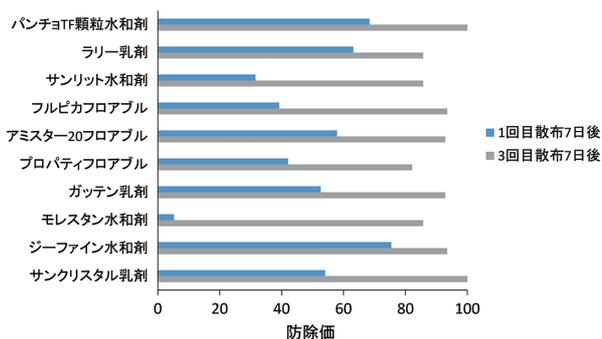


図2 各種薬剤の防除効果

3. 実用化に向けた対応

イチゴうどんこ病では、DMI剤やQoI剤（表）に対する感受性の低下が全国で報告されています。今回使用した菌株では、これら薬剤の感受性低下は認められませんでした。今後も継続して感受性のモニタリングを行う必要があります。また、今回の調査から、イチゴうどんこ病に対していずれの薬剤も1回散布では抑えきれず、1週間間隔で複数回散布することが有効と考えられました。ただし、同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発達を助長するため、実際の散布では異なる系統の薬剤を使用するようにします。

（環境科 芳田侃大）